



**HACK**

**7**

**盗撮**

**KAI SHIGIHARA**



### 7 盗撮

冷静にならなければならないのだが、そう思っているのは脳味噌のごく一部という感じで、それ以外はすべてどうかしてしまっていた。

誰がどんな目的で送ってきたのかなんて、わからない。だから、推測で動くのは間違っている。そんな風に自分に言い聞かせ、ドミニクへの報告は明日以降にってしまった。任務中の二人を盗撮したものなのだから、報告の義務があるだろうとわかっているのにだ。

とにかく、頭の中からシャットアウトしなければ、自分がどうにかなってしまいそうだった。冷静な対処など出来ず、デスクの引き出しの奥に押し込め、なかったこととした。

体の震えや冷や汗はどうにか隠せても、顔色の悪さはどうしようもなく、周囲にとっても心配され、終業後すぐに帰ることにした。だが、どうしても一人で帰る気にはなれず、体調の悪さを理由に、同僚の女性にマンションまで着いてきてもらうことにした。普段、そんなことをお願いすることはないので、不審に思われたようだが、顔色の悪さで納得してくれたようだった。

こういう時に頼れる友達が一人もいないことに、改めて落ち込んでしまうが、急に体調が悪くなったレスリーに周囲は優しく、心配してくれたのが救いだった。

「マンション、近いのね。タクシー使っちゃう？」

最寄りの駅を伝えると、同僚はそう提案してくれた。

「そうしようかな。拾えればいいけど」

「大丈夫だと思うわよ。守衛所から呼んでもらえないか聞いてみるわね」

セキュリティーを抜けて、守衛所のある門へと向かう。

いつの間にか日が落ちる時間も早くなり、朝晩は冷えるようになってきた。夕方五時だが、もう日は落ちようとしている。暗い、それだけで、レスリーの背中をぞくぞくとした恐怖が走る。

(レスリー)

頭の中で声が聞こえた。そんなことが出来る友人はいないし、その感じには覚えがあった。

周囲を見回すと、レスリーの視界の中に入るように、守衛所の陰からジュリアスが姿を見せる。二週間ぶりの、彼だった。

「大丈夫？ 家まで送るよ」

二週間ぶりのジュリアスは、記憶の中の彼より素敵だった。少し伸びて額に垂れている淡い色の髪。端正な顔立ちは、頬が少しシャープになっていて、シルバーの細い眼鏡がとてもよく似合っている。それに、リゾートの夏な装いより、今のような薄手のトレンチコートにスーツのほうが似合っていた。

「ええっと、レスリー、そうする？」

一緒に来てくれた同僚が、興味深々といった感じに、ジュリアスと自分を比べて見ているのがわかったが、何か言い訳をしようとも思えなかった。ジュリアスの顔を見た途端、体中の力が抜けてしまった。認めたくないけれど、深い安堵で。

ごく一部の冷静な脳味噌を無視し、レスリーの心と体はジュリアスの方へと一歩進み出る。それをジュリアスはごく自然に受け止めて、彼の方から大股でレスリーに一歩近づくと、レスリーの肩を抱き寄せて、胸の中に引き込んでくれた。

「それじゃ、彼女、お願いします。夕方、急に具合が悪くなってしまって。本人は寝れば治るって言ってるんですけど」

「ありがとうございます。多分、ちょっと疲れているだけじゃないかな」

同僚が持ってくれていたレスリーの手荷物が、ジュリアスの手へと渡される。

「お大事にね、レスリー」

「ありがとう」

どうにかそれだけ声を出すことが出来た。同僚の彼女は、悪戯っぽい表情でウィンクして、これはきっと後日ジュリアスのことについて話を聞かせろという意味だろう、笑顔で帰っていった。

「車で来てるから。駐車場まで歩ける？」

「大丈夫」

何も言わない、何も聞かないジュリアスがありがたかった。

ドミニクの話しでは、きっと色々と言いたいことも聞きたいこともあるだろうに、今はレスリーの体調だけを気にしてくれている。

「ありがとう、ごめんね」

「気にしないでいいよ」

彼が本気でそう思っているのは、肩に触れている彼の掌から伝わってくるようだった。

軍の駐車場にとめてあったジュリアスの車に乗り、レスリーは自宅マンションまで送ってもらうことになった。

この前の任務のとき、ジュリアスには自宅まで迎えに来てもらっているのだから、彼は住所を知っている。運転がうまいことも、この前のドライブで体験済みだ。助手席に座り、ベルトをしめると、自然とほっと溜息が洩れた。

「夕方、何があった？」

エンジンをスタートさせながら、ジュリアスに聞かれた。

「……どうして？」

「あれだけ大声で悲鳴を上げられれば、聞こえてくるよ」

「あげてないし」

「すごい恐怖だった。何があった？」

「……話したくないの」

ジュリアス相手に嘘やごまかしは通用しない。だけど、優しい人だから、正直に話したくないと言えれば受け入れてくれるのは知ってる。

「ごめんなさい。あなたに会いたくないって言って、忘れようとさえしていたのに、来てくれて嬉しいって思ってる。自分勝手でするってわかってる」

「来たのは俺の勝手だよ」

「あなたのお兄様は怒っていたわ」

「ドニからは電話があったよ。立ち入りすぎたし、君に言いすぎたと謝っていた。許してやってほしい」

「彼が怒るのは当然よ。許してほしいのは私の方」

窓の外に、自宅マンションが見えてきた。早く、安全な自宅に帰りたかった。

「あなたが私に会いたって思っているなんて、知らなかった」

「別れ際に連絡先を聞いたのに？」

「私はただ、仕事とプライベートをはっきりさせようとしただけなの。それであなたを悩ませたのなら、謝るわ」

「君は悪くない。仕事上のパートナーとしての俺はよくても、プライベートで付き合うつもりはないって、君はきっぱり意思表示した。連絡先を教えないという行動でね。振られた俺は、どうして振られたのかって、うじうじいつまでも悩んでいたというだけのことだ」

「そんな、大袈裟じゃない？」

振られたなんて、連絡先を教えなかったというだけで、そこまでの話になるだろうか。付き合いあってほしいなんて言われてない。友人だって、連絡先の交換ぐらいするし。

「言葉にはしなかったけれど、俺達はわかっていた。この先も会うのなら、あのキスの続きをすることになる。あの時の気持ちをもっと突き詰めていくことになるって」

「……」

「だが、君はそれを望まなかった。俺との間で起こりそうだったすべてを、俺ごと忘れることにした。俺をシャットアウトしようとする君の強い意思は、俺を寄せ付けなかった。会いに行くことは勿論、電話もメールも出来なかった。文字通り、出来なかったんだ。そうしようとする、君の強い拒否を感じて、頭がガンガンした。そこまでの拒否をされるなんて、どうしてなのかと考えたよ。嫌われるようなことをしたのか、馬鹿なことを言ってしまったのかとか。恋人同士という設定だから、君は俺と仲良くしてくれていたけど、実は嫌われていたのかもしれないとか」

「そうじゃないのは、あなたにもわかっていたはずよ」

「俺の知っている君は、ここまで徹底的に俺を拒否するような人じゃなかったから、だから悩んだ。ずっと君のことを考えていたし、君のことを考えてしまう自分のことを考えていた。君を愛しているんだ、レスリー」

その言葉に咄嗟に浮かんでしまったのは、強い拒否だった。

「っ、」

ジュリアスは低くうめき、それでもきちんとウィンカーをだして、車を路肩にとめた。だが、サイドブレーキをふむなり、ハンドルにつっぱして、こめかみのあたりを指で押さえてしまう。

痛みに耐えているかのように、歯をかみしめ、眉間にぎゅうっとしわを寄せて目を閉ざしている。

顔色もみるみる悪くなり、額から頬へ、汗が一筋流れていくのが見えた。

「ジュリアス？」

「……ここまで強烈にふられたの、生まれて初めてだ」

喉の奥でくつくつと笑い、ジュリアスはハンドルにつっぱしたまま、レスリーの方へと顔を向けた。

「覚悟していたけど、本当に君の意思は強烈だ」

「ジュリアス」

告白されて拒否してしまったのが、ジュリアスには伝わってしまったらしい。

だがそれは、強烈にジュリアスを拒否しているわけではなく、動物的な反射行動というか、アレルギー反応みたいなものだから、すごく強くなってしまったのだ。それをジュリアスに説明して謝罪したい。でもそのためには、どうしてそんなアレルギー反応があるのか、説明しなければならないだろう。それは、出来ない。

「ジュリアス、ごめんなさい」

「大丈夫。ふられるのわかっていて言ったんだから。自分で自分の感情にけりをつけるためだから。だから、気にしなくていいよ」

先程の拒否は、ジュリアスに強いダメージを与えたらしく、痛みに耐えるかのように、ぎゅっと目を閉ざしたり、ネクタイを緩めたりしている。

「今日、君の強い恐怖を感じて、君を助けに行かなければと思った。君に会いに行こうとすると、いつもは君の拒否に足が動かなくなっていたが、今日は大丈夫だった。その前に、ドニから電話をもらって、君が俺を気味悪がっていないこと、仕事ならまた一緒にしてもいいと思っていることを聞いていた。君にとって、友達とか恋人とか、そういう対象に俺はならないのだとしても、何かあったときに信頼してもらえるパートナーとしての俺は認めてもらえているようで嬉しかったんだ。だから、会いに来た。この先も、会いたいんだ。友人とか恋人としてではなく、実際に仕事はしていなくても、同士？として。君は、俺が踏み込み過ぎるのを恐れているかもしれないが、この通り、君の強い意思は、俺より強い。だから、俺と会っても、君を困らせることは起きない。それをわかってもらいたくて、駄目なのはわかっていて告白したんだ。……レスリー？」

ジュリアスのいぶかしげな視線が向いていることを感じていたが、レスリーは何も言えなかった。ただ俯いて、声を出さないように泣くので精一杯だった。

「レスリー？」

「ちょっと待って。ちょっとだけ」

レスリーは自分のバッグからハンカチを取り出すと、涙をふき、目がしらにぎゅっとハンカチを押し当てる。

そして、ゆっくりと深呼吸した。

「私ね、以前、付き合っていた人とうまく別れられなくて、彼、ストーカーになったの」

誰かに話すのは初めてだった。だが、ジュリアスには話さなければならないと思えた。

「最後には裁判までなって、接近禁止令が出て、それでようやくストーカー行為は終わったの。でも、私、それ以来、男性とお付き合いするのが怖くなったのよ」

ふうと息をつくと、体の力が抜けた。

「裁判の後、カウンセラーにも通ったわ。だから、自分が悪いわけじゃないとか、次に付き合う人もストーカーになるわけじゃないとか、頭ではわかっているの。でもそういうのって、理屈じゃないのよね。あの時の恐怖体験が私に残っていて、フラッシュバックするの。男性に言い寄られたり、告白、されたりするとね」

勇気をだして、ジュリアスの方に視線をむける。ジュリアスは真剣な顔で、レスリーの話聞いてくれていた。

「あなたは素敵な人だわ、ジュリアス。私がそう思っていることは、あなただけ知っているでしょ。私はあなたに魅かれていて、それで怖くなったの。あなたに魅かれて自分の気持ちも、この先、あなたと一緒にいたら始まるであろう何もかも。だから、あなたのことは全部拒否するしかなかった。そうしないと、気持ちがどんどん大きくなるのがわかった。私にはそれが怖くて怖くてたまらないの、ジュリアス」

「レスリー」

顔を上げると、運転席から身を乗り出しているジュリアスが、とても近くにいた。

彼の綺麗な緑の瞳が、じっとレスリーを見つめている。目には、深い愛情と、優しさと、何よりも強く、レスリーを守りたいと思う気持ちにあふれていた。愛している人を大切にしたい、幸せにしたいと願う、純粹でまっすぐな気持ち。そして、ジュリアスがキスしたいと思っているのを、レスリーは感じた。

それは、彼が頭の中に話しかけてくるのとは違って、はっきりとした言葉ではなかった。だが、彼がそう強く思っていることが、レスリーが愛おしくてたまらなくて、抱きしめてキスをしたと思っていることが、言葉ではなく熱い感情で伝わってきた。

「だめよ」

震える声でつぶやくと、ジュリアスは驚いて目を見張った。自分の感情がレスリーに伝わっているとは思っていなかったらしい。

ジュリアスは目を細め、レスリーの頬に手を伸ばしてきた。もう彼に触れられても、あの静電気みたいなものは感じない。多分、最初は反発していた二人が、お互いになじみ、わかり合ってきたからではないだろうか。

頬を包む大きな手に、少し顔を上向かされる。抵抗なくあげれば、唇にジュリアスの唇が落ちてきた。

「んっ」

情熱的なキスに、喉の奥がなる。存在を確かめるように、上唇を舐められ、下唇を軽く噛まれた。その後、ジュリアスの舌先はレスリーの歯列をなぞり、その奥へ入りこんでくる。レスリーの舌を探し当てると、最初は性急に求めてきた。

「愛している」

ほんの一瞬、唇をはなしてそう囁くと、ジュリアスはまた貪るように唇を重ねてくる。

最初はシートをつかんでいた手も、いつの間にかレスリーの背中へとまわっていた。痛いぐらいに、ぎゅっと抱きしめられる。

「レスリー、俺は君を傷つけないし」

熱く囁かれる。キスは次第に落ちてきて、ゆっくりとお互いを感じるように、舌と舌をからませ、背中の手は何度も優しく愛撫してきた。

「君の方が強いから、傷つけられない、と言うべきか」

レスリーは小さく笑う。勿論、レスリーの方が強いなんてことはない。腕力だって、異能力だって、ジュリアスのほうが優れている。レスリーが強いのは、意思の力ぐらいで、それだってジュリアスが本気をだしたらどこまで通用するのか、わからないと思っている。

自分の弱みをさらけだして、負けたって言えるのは、ジュリアスが本当に強いからだ。そして、本当に強い人は、弱いものを虐げたりしない。守ってくれる。

「君を守りたいんだ。この気持ちを証明させてほしい。信じてほしいんだ」

「ジュリアス」

「急がないと約束する。だから、もっと俺に会ってほしい。俺と付き合っほしい」

情熱的なキスで高揚した気持ちが、すうっと冷えて行くのが自分でもわかった。

そして、ジュリアスにも伝わったのだろう。彼は失敗したという顔をした。それがおかしくて、レスリーはちょっぴり微笑んだ。

「君の笑顔が好きだ」

頬に触れるだけのキスをして、ジュリアスが囁いた。

「俺に見せてくれる笑顔は、特に」

「私もあなたの笑顔、大好きよ」

レスリーがそう返すと、ジュリアスは笑顔になった。

ぽすりと、彼の胸の中に額を押し当てる。もう、自分の中のジュリアスへの気持ちを消すことは不可能だろう。ジュリアスに愛されていると知ってしまった今、以前のように拒否できる自信もない。それにもう、色々と始まってしまった。走り出した気持ちを止めることは難しい。

「私、追いかけてまわされるのは苦手なの」

「わかった」

「それから、メールとか電話もいや」

「しないよ」

「本当に？ どうやって連絡とるの？」

「別れ際に、次の約束をすればいい。明日、夕食に行こう。何時に迎えに行けばいい？」

「でも、残業になったりとか、急な予定変更とか」

「じゃあ、ドミニクに伝言してくれればいいよ」

レスリーは小さく吹き出した。

「やだ。上司にそんなこと頼むの？」

「ちょっとやな顔しつつも、喜んでやってくれるよ」

いかにも弟といった感じの言い草に、レスリーは声をたてて笑う。

そんなレスリーを優しく抱きしめながら、ジュリアスが愛しているよと囁いてくれるのを、レスリーはふわふわした幸せな気分で聞いていた。